



児玉 知之●著

戦略としての医療面接術 —こうすればコミュニケーション能力は 確実に向上する—

評者

木村 哲也（聖路加国際病院神経内科部長）

●コミュニケーションの“型”を作る

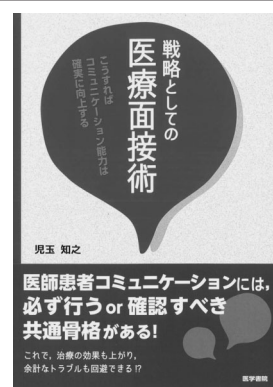
「問題患者さんが増えて困った時代だよなあ、こっちは“医学的に”正しく対応しているのに」とほやかすにはいられない先生方には、ぜひご一読いただきたい本である。さすが児玉知之先生（柏厚生総合病院内科）の著書だけあって、エビデンスや概念がより実践的な形で具現化されている。

全体の構成は、医療面接に必要なスキルが全12章にまとめられ、各章ごとに症例提示から始まっていてわかりやすい。多くの先生方にとって、「これ普通の対応だよな」「そうそう、こんなのあるある」「何が悪いんだ」と心の中で叫んでしまいそうな症例ばかりであるが、読み進めていくうちに、問題

点が明らかとなり、どう対応すべきだったかが述べられていく。

特筆すべきは「解釈モデル」とか「アドヒアランス」などの概念を、抽象論のままでなく、具体的な言葉・態度にまで落としこんでいる点である。コミュニケーションに関心があれば、誰でも耳にしたことがある「open question」と「closed question」や、「Iメッセージ」と「YOUメッセージ」なども、使い所のシチュエーションについての記述がはっきりしていて、スキルとしての位置づけが明確である。すぐに臨床の場で使えるようになっている点が素晴らしい。「傾聴」と「共感」を別の章立てにした著者の思いもひしひしと伝わってくる。

空手道の美しい“型”が日頃の技術



的鍛錬のみならず、武道の“こころ”に裏づけられているように、医療面接/コミュニケーションに必要な技術を“型”として身につけ、さらに医師としてあるべき“こころ”にも変化が起これば、著者の思うつぼだろう。内科医としても、精神科医としても優れた著者であるからこそ書くことのできた良書である。ぜひご一読いただき、自分なりのコミュニケーションの型を作っていただければと思う。評者も反省しながら、翌日からの診療にあたっている。

A5 頁272 2015年11月 医学書院刊
定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-260-02162-3]